



口仁
2300



門口仁
號 2300



七つ兜めしむる年事しるしありて
 毎々心算し易き又女一人に
 三々中々し初花は海に波に
 流大しきふ文質は生暖は也
 ちぬかたもまゝに身かたも
 しるしお人みよに年々人
 人々も心算し易き又女一人に
 三々中々し初花は海に波に
 流大しきふ文質は生暖は也
 ちぬかたもまゝに身かたも
 しるしお人みよに年々人

五節句由来

正月七日と着菜は
 句と又人日と七
 菜の節は
 節句かごまやうはこ
 節句はとけのぶすか
 ちぬかたもまゝに身かたも
 しるしお人みよに年々人



二月三日
 弥生節かど色上巳
 とし子
 菫を車る申の麻時
 記一田中少丞の二月
 けドめて生に草花系
 白くして清し三月三日
 是成るとは條と
 申す柑花を飾り
 ひと一竹の百病を治ま
 と皆邪氣をさしめて
 新地よりあそびめて
 よつひをのぶるあそび
 あり
 系小
 こもやせふあそび柑の
 大と一よりささく喜小
 あしふさるるか



五月五日
 端午とも菖蒲まよとも
 子家の軒端にまよ
 ぶあや先をさしはま
 した書ふええきり
 内裏南殿の糸ふと
 あり物とささく理
 歳の記一田中日菖蒲
 をたて縁乃とささ
 細末よして酒ふとて
 竹の陽ををゆけ年と
 延をり
 系小
 このふさくふさく
 かりひあやめ草
 久つがやどの
 けりふさるるか



七月七日

七夕といふ又宵夏とも
いふに龍牽牛織女
野あひ恋といふ女
糸と着ふふり酒
など飾りて甘
とせまふり春
取てまのれ
のそくをいり
堂をそめんの

奇小

ひまご

あひ
えくも
うら

七夕

のいと
ちま
とほ

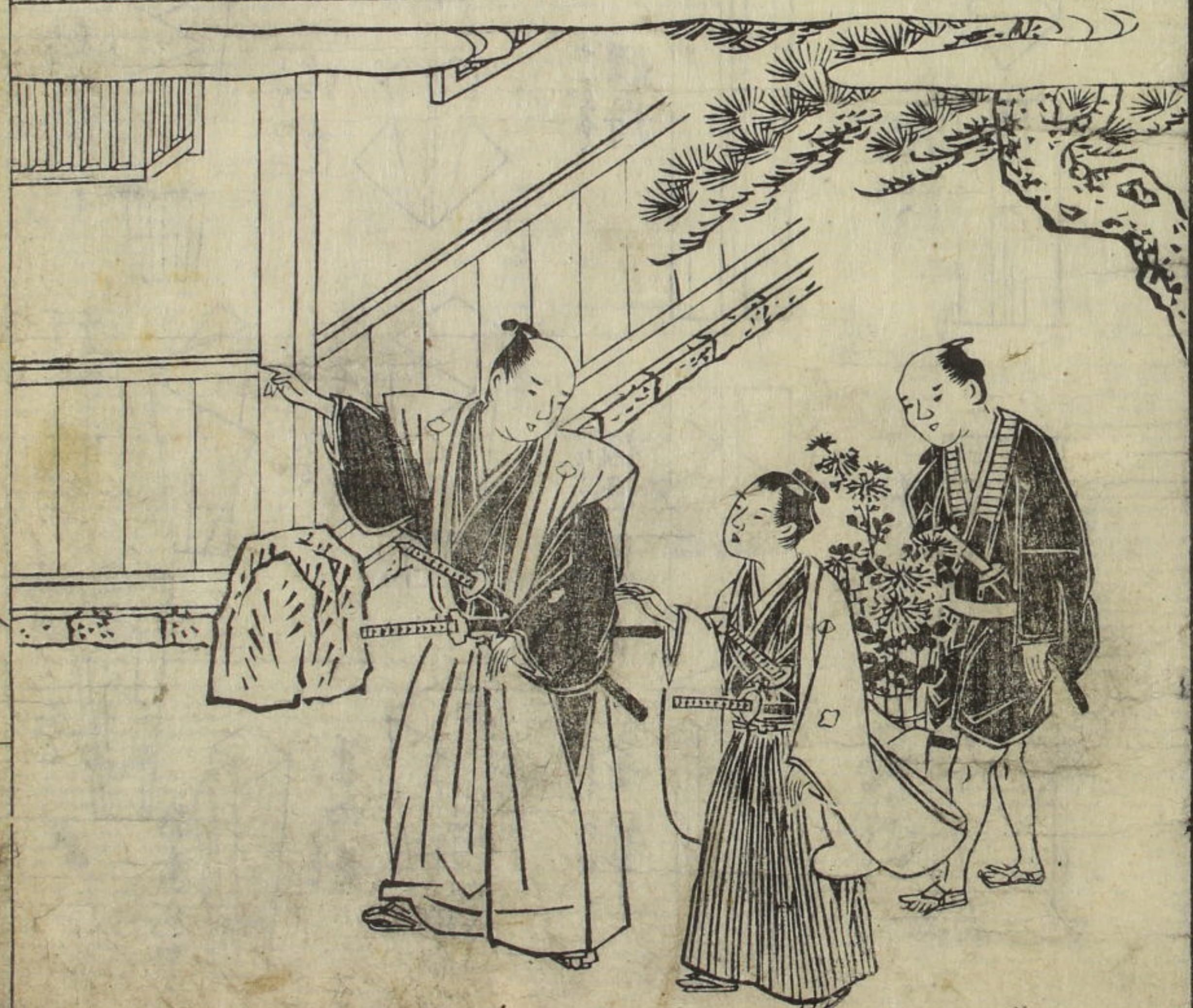


九月九日

冬陽といふ九の陽
三つあたる候をいり
菊といふはけり
不他人さくを系
より七百歳を強
一ノ菊童子といふ
黄長房いふ入菊
酒のそてはひ
まぬるつぎまよ
久しきぬあり
こたん

奇小

我者乃てこれ
あふいふい
あらとるん



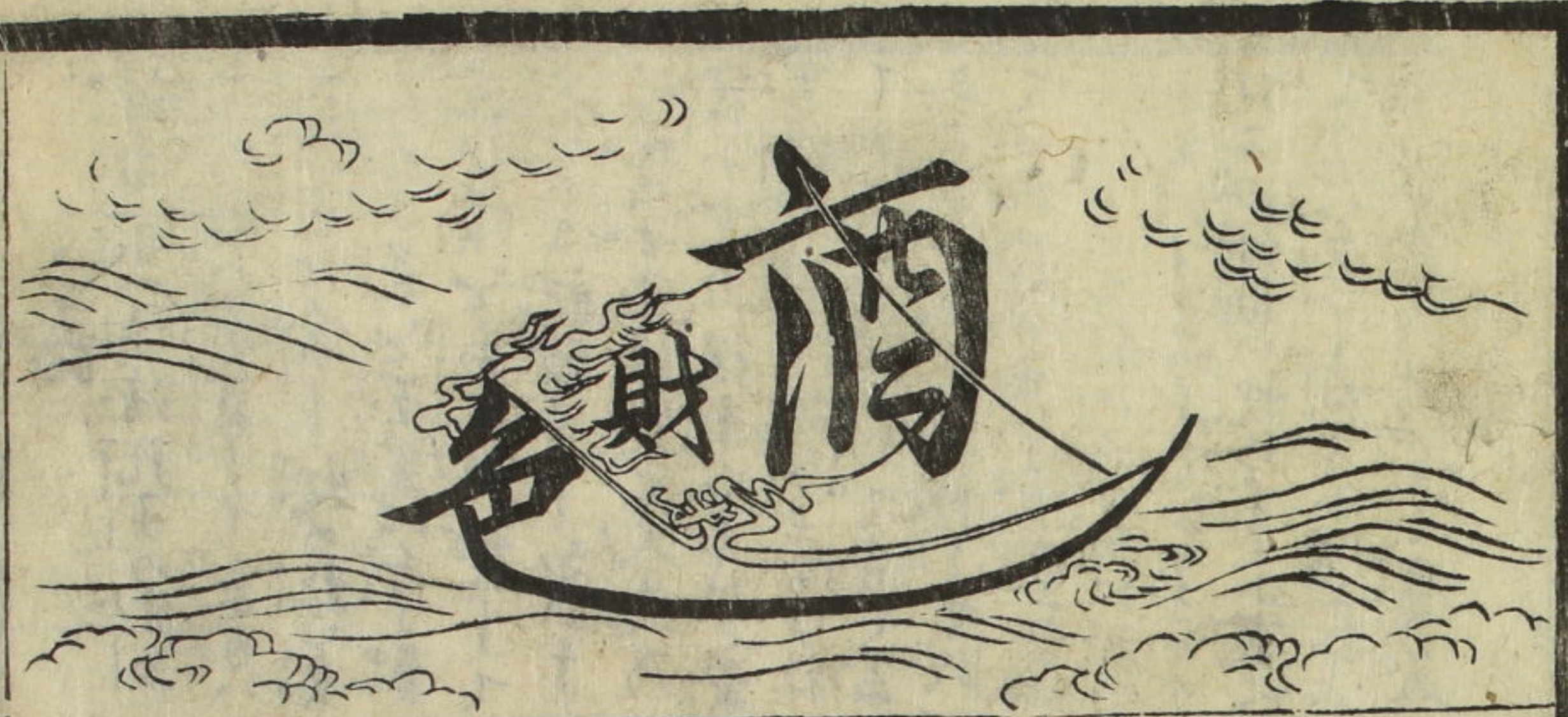


大舜 たいしゆん 大舜 たいしゆん
 大舜の而孝りたる人
 父れ名いことしとて
 かこふあて母の其後人
 背ハ又ふ孝りて佳人とされ
 ども大舜の孝りて
 いたせりある時歴山と云ふ
 耕作をけふふれが孝りて
 して大舜来て田を耕又
 多花来て田乃多花より耕
 作れはけりたるあり
 さてその時の天下れはあど
 とハ堯帝と名付たてまつり
 姫君御すは姉とは姓を
 中妹ハ女英とすはり堯帝の
 舜の孝りたるをこそ
 めハは娘と名にたてはれお
 天下流りたるあり是を
 孝りのふるさやうりおこれり

孝 まこと 行 ゆく 海 うみ 養 やし
 孝と行と海と養と
 通 とが 天 あめ 地 つち 下 かみ の
 通ハ天一地ニ下の
 孝 あひ あり 乾 けん 坤 こん 陰 いん 陽 やう
 孝あり乾坤陰陽
 孝 あひ あり 湯 たう 小 せう 子 し
 孝あり湯小子

孝 まこと 行 ゆく 海 うみ 養 やし
 孝と行と海と養と
 通 とが 天 あめ 地 つち 下 かみ の
 通ハ天一地ニ下の
 孝 あひ あり 乾 けん 坤 こん 陰 いん 陽 やう
 孝あり乾坤陰陽
 孝 あひ あり 湯 たう 小 せう 子 し
 孝あり湯小子

孝行海養
 通天一地下の
 孝あり乾坤陰陽
 孝あり湯小子



酒色財

後漢の楊秉字叔元字
 徳と書かれて桓帝を諷
 三公の大尉に就き忠
 清くこれを桓帝を諷
 君を諷も楊秉潔白
 して丹波を抽するより
 大が陳とれ納らるる
 楊秉生侯酒を飲す
 とらばまば又早く
 喪いて二ふび夫人を
 奪ていともあまの惑
 さるあり酒を飲なり
 人れををわらハ
 正す然に貪りや
 乃ち以て其の形と
 告して以て警戒とす
 ナリ

男子志乃右の法

女子れま進退内

大小是尔なす

自然なり禮儀二百

威儀之教惛畏弱小

か〜〜〜礼の儀

穉穰とよの皆

事なつゝ其程と

知らざれば論

似川威儀をく



子路
仲由字子路孔子の弟子
なり始に貧して衣履ハ
藜藿を食ひ一担の糧を眞
んろふ糸とを里に賣り負
運ひ價を以て後給して
其より親を養ふ一ひひま
ほ林之小丘に於て大夫乃
宿せり後車とを之棄
万途を捨て親を養ふ
て居一担を以て食ひ
其も其具を以て之を
て曰只藜藿を食ふと
てなりとも親の養ふ
ともはすといひて
孔子曰仲由ハ親の養ふ事
ハ力と雖も死すは之
思ひと盡し老やと褒美
にまひり

懇勤尻落ふはぬべ

ましめぶのちちて

和柔はるら教情のふ

似せるとや男女を

席と別つこはちん

茶敬せんもめなれ

鸞鶴のきりもりど

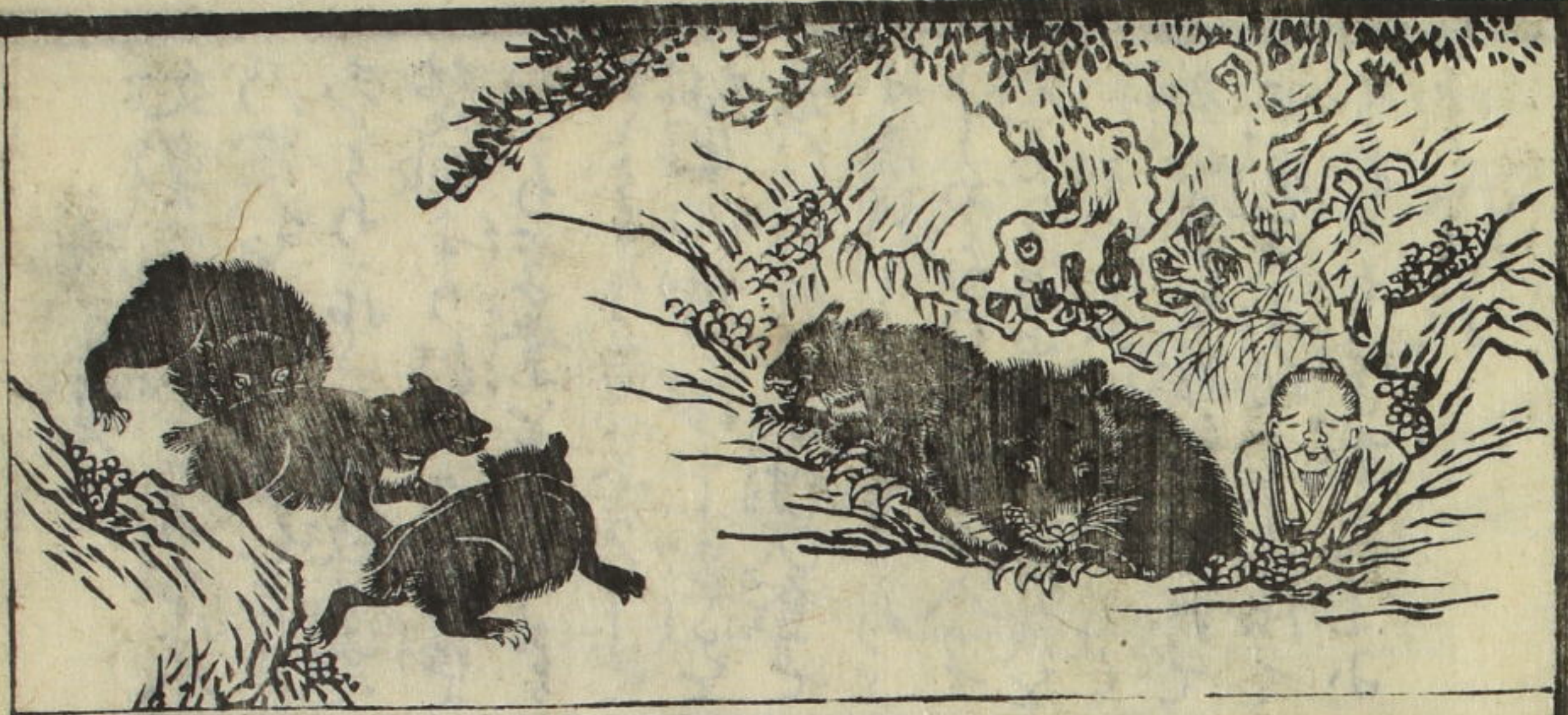
人ふそあを解とも

もはらひかきも食飲と

もあはぬゆい礼は清

熊救人

晋の界平年中、人あり、
入て鹿を射し、
酒更み、
人、
解いて、
遂に、
續搜神記にあり



おはす、
知る、
ふ、
抑、
肺、

推、
祝、
酒、
中、
海、

孫文實 そんぶんじつ
 文實の字文とこの人
 乃出入といふは
 ありあり孫敬の字
 楚國よりけり
 いりり字業と
 名に母と砂
 母ははるおけい登りて
 小屋清とめあき
 かのり字察入りて
 柳の葉と拾ひて編綴て
 半巻の字林天下
 字一丸



孫志下 そんしげ 彦より ひこより 仕れ
 出 い 決 けつ も も 彦 ひこ あり
 へ へ 怒 ど 池 いけ 一 ひと 掃 はき へ
 腦 なん 尔 に ち ち ら ら ぶ ぶ 上 じやう 望 ぼう の
 換 かひ 投 たう わ わ る る 身 み

勤 ちん 記 き 成 せい 元 げん 合 がっ へ へ 今 こん へ へ 今 こん へ へ 今 こん へ へ
 先 せん 偏 へん 是 し 尔 に 孫 そん 彦 ひこ 彦 ひこ 彦 ひこ
 海 かい へ へ も も や や 禮 らい の の 陰 いん 陽 やう と
 表 ひょう に に ち ち ら ら ち ち の の 物 もの

元徳秀

唐元徳秀秘傳
時兄早死より
幼子と産二月の好嫂亦
死に傍とせしむる
元徳秀の心を
哀に感ずる乳房と會て小
児の泣と止るに十日計
乃る乳汁出でて
救は元徳秀の誠心
天地神明感す母の事
湧出て人皆涙の思ひ
たりと遂に母を
とせ徳秀の曾父の代官
となり信心廣直政化を
なり那れ民の徳に法
飲ふ作りて詠るとなり



き せけん ちやう
き 徳上下とて

やう とう
陽をを止る甲ゆき

こしり
理梨なる成たのふ

うけ とうり ひたり
物と徳たのふ下へ

こころ え
流たるやゆきを

はたらき
我は用を右なり

あつみ ぶい 乃時
あつみ 小見乃時

まろし
茶と右のふり

あつみ くと 知礼
あつみ くと 知礼

あつみ くと 徳
あつみ くと 徳

司馬溫公

温公宋初の大儒なり其
兄伯康よりて友をり
とも厚く年八旬にして
父を孝するよりて嬰児を
育すこと一子に食
志てまばらけられし餘
りかかやと云ふも
其の目も背もなぞ
夜うすことかやと
同く兄弟を愛する
と云ふこと奉事
すはふを物
ぬ



出を魚一車ふ志と

ふ海ぬおひとてえ

又魚れ後合舟ぬ

ものそ一若人名

直舟のちと西と

葡萄て物とさげて

体不時捺り捺近

すはへ一君と物と

給ひなは檣棹と

柁けつを檣棹八袂ふ

関子書

関子書いとはして母を
しなりの父又書きて
免く二人の子をかりの
書我子深くをいて
継子深くをいて
書れ極とてをい入
てさるる身も
後ひるをえて父の
書と云んと云れ関子
寒う白今書とより
三人乃子をい
去人多くと
二人の腹は
父と依りれ
継母もほ



屋ふかたしひも席

意に屋一又おれと

あまともさけ野はれ

祈沉まかーおれ

祈もあもに

心ありまをまよ

あのもいもはるかふ

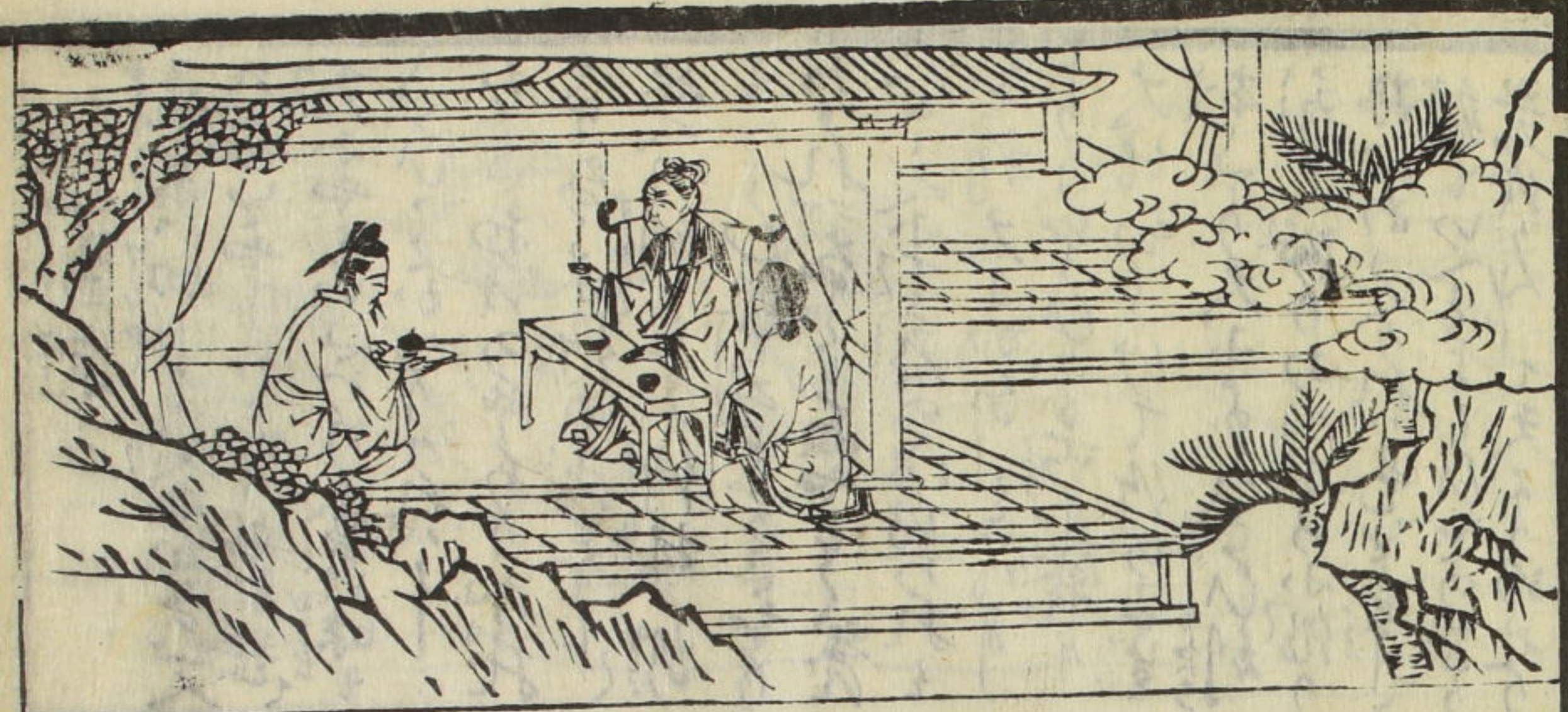
目とらて其の

あもに向ふく極と

むらけの極とを膝と

漢文帝

漢文帝は漢の第5代
 の天子なり母は太后
 孝行の可れ食事を
 まつてやると時を
 こころめりあつて
 け帝は仁義を
 孝りあつて
 考りたれ上二人
 民を愛する
 しとて身を行ひ
 ありては
 ありては
 ありては
 ありては
 ありては



あやなれは徳あり
 涙の折婦ふも
 持とのとるは徳あり
 徳との事にいれ
 文の要ありとて
 文の要ありとて

徳道とて年い徳あり
 是とて人なるは
 徳成時の草のま
 徳成時の草のま
 徳成時の草のま
 徳成時の草のま
 徳成時の草のま

孝母

唐の李京讓が母鄭氏を
やめたる幼子を育て
て孝の文をなすを孝と
をこころしと教りて
おの頃をばれり地流り
あや一そとをかたの
れはふ孫あり申ふ孫
りてつり鄭氏天子
向て孝いとて若くも
あや一そとをかたの
天遂も一孝負ゆ
あや一そとをかたの
たふとてこれかた
りてつり鄭氏天子
向て孝いとて若くも



足ふるはむして品也
同第の書母と板目
さかぶもものなぬを
恰合と母と家
方と母と一折礼の

源は多と後
礼と禮記乃と
足えと禮と大概
足えと禮と大概
足えと禮と大概
足えと禮と大概



范文正公
 宋此范文正公乃子
 紙月婦傳事其子
 終に其の傳婦其乃
 紹操に終るは其子
 緒とてり出正公是を
 又く吾家信儉ありて
 孝後とふせぐ家あめ
 婦とありば家あめ乃
 法とてり出正公是を
 て即火とてり出正公
 慢と危あめて禁
 められりてり出正公

今志あるを耐ら
 先ち後へ技持屋
 盟と進る其や此を
 少者樂とてり出正公
 也老らぬ成捧つ

ありけし氣分おさけ
 智と悟るもふ夜の
 燐ささるる成りて
 痛之瘡きりお中へ惟
 弱ひく抑搔せよあ
 ありけし氣分おさけ
 智と悟るもふ夜の
 燐ささるる成りて
 痛之瘡きりお中へ惟
 弱ひく抑搔せよあ



才一也たひち重乃作ひぢり
 おの道みちきりり



抑おさ毎まいいをを繋つなぎぎとと結むすぶぶ一一一一ええずずにに樂たのししいい
 ありあり後のちととつつくく一一ええびびややむむくく昔むかしのの
 途みち亦またををかかりりののいいふふののささららににええんん
 いいふふののささららににああれれとと續つづぐぐんん
 人ひと乃の乃のののささけけくくむむづづ一一むむづづのの
 一一ののああららむむ物ものももああららむむひひめめのの
 木きははままままままのの葉はよよりり出でるる

尾陽城南醫隱
 田島池龍養良元
 謹述

尾陽城南醫隱

田島池龍養良元

謹述



渡世肝要記 全二冊 立花尚用集 全一冊

繪本今川狀 全二冊 妙藥多引系 全一冊

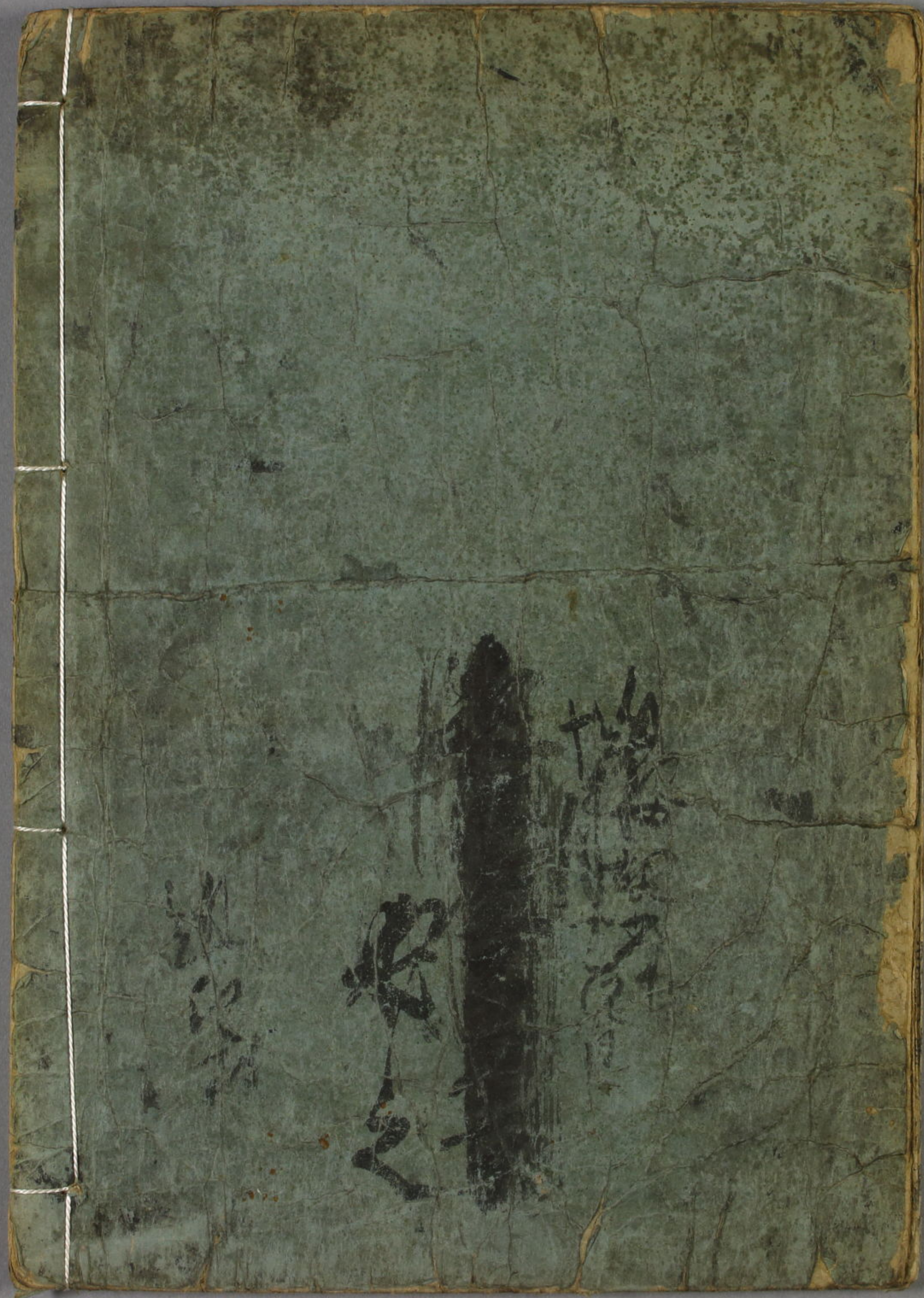
同 孝經 全一冊 一筆画譜 全一冊

早速千字文 全一冊 蕙齋系画 全一冊

医家千字文 全一冊 又鳳系画 全一冊

略解千字文 全一冊 北雲漫画 全一冊

尾張名古屋
本町通七丁目
書肆 永樂屋東四郎



The central vertical strip contains Chinese characters, likely the title of the book. The characters are arranged vertically and appear to be written in a traditional calligraphic style. The top character is likely '佛' (Buddha), and the middle character is likely '經' (Sutra). The bottom character is less clear but could be '集' (Collection) or '卷' (Volume). The full title is likely '佛經集' (Buddhist Sutra Collection).